

近代英国翻訳論—解題と訳文 キャサリン・フィリップス 書簡集(抄)

大久保友博

(京都大学大学院人間・環境学研究科博士候補生)

本稿は、17 世紀の女流作家キャサリン・フィリップスが書簡に残した翻訳論の本邦初訳を試み、その理解に必要な情報も併せて簡便に提供するものである。構成としては、まず当人の伝記的事実に短く触れ、そののち彼女の書簡集について、底本テキストの検討、内容・背景についての解説、そして日本語による抄訳の順に、まとめて記述する。

0. キャサリン・フィリップス小伝

〈比類なきオリнда〉とも呼ばれるキャサリン・フィリップス(Katherine Philips, the Matchless Orinda 1632-1664)はロンドンの中流階級の生まれで、17 世紀前半に郊外に増えつつあった寄宿制の女学校でフランス語や音楽といった淑女のたしなみを身につけた女性である。16 歳のとき母親の再婚相手の縁者と結婚して、ウェールズ西部のカーディガンに住むことになるが、これだけならありふれた 17 世紀の一般女性に過ぎない。

しかし彼女が他と変わっていたのは、知人に文芸をたしなむ名士が多く、さらに 40 年代の女学校で流行したプラトンの友愛に強く感化され、自分を中心とした〈友愛団 the Society of Friendship〉という秘密結社めいたものを想像力豊かに作り上げたことだ。女学校仲間や気の置けない女友達、その周辺の信頼できる男性に古典やフランスのロマンスを典拠とした牧歌的な二つ名を与え、友情を高らかに歌った詩や、思いの丈をつづった手紙を送る。その友愛は一方通行になることも多く、親友らとの絶交も少なくなかったが、17 世紀半ば内戦に揺れる不安定な世情のなか、閉じた内輪の社会で文を回覧させ、共有させることで心身の安定と平穩を保ったとも言えよう。

女性が男性の所有物と考えられた時代が過ぎたとはいえ、プロテスタントの考え方では、依然として女性は結婚により男性への心身合一を求められ、自身の自由を得られるにはほど遠かった。娘時代は父親に管理され、妻となつては夫に傳かなければいけない社会にあつて、寄宿制の女学校はある種のヘイヴンであつただろう。女性が文芸に励むことも疎んじられていたが、囲いである家庭からいったん離れば、そういった偏見からも逃れ、同志的結びつきから相互にやりとりしつつ作品を育むことができる。

彼女の〈友愛団〉はそういった女学校の空気を外へ出てもなお続けようとする試みでもあるが、団長たる彼女に選ばれ共通の友情を捧げたメンバーは、入れ替わり立ち替わりしつつ、王政

復古前でのべ 20 人ほどを数えたという。ただ男性団員は継続的なものに対して、女性団員との関係は壊れやすく、その理由にはやはり結婚関連が多い。〈ロザニーア〉という女学生時代からの一番の親友とは、1652 年に相手の結婚から疎遠になり絶交している上、その後釜となった〈ルーケイシア〉とも王政復古後の 1662 年に決裂しているが、いずれも〈彼女らの友愛〉を理解しない男性や親族の割り込みがオリンダの気に入らなかったようだ。後者の場合では、再婚してアイルランドに移住するという親友を思いとどまらせようと、結婚式の付き添い名目で相手先の実家へ押しかけまでした。

もちろんうまく行くはずもなく長年の友情は終わるのだが、傷ついた心が少しでも癒えればと地元のウェールズへ帰らず 62 年の 7 月末にダブリンへやってきたことが彼女の転機となる。ひょんなことから彼女が趣味でやっていた戯曲翻訳の原稿が現地の有力者の目に留まり、にわかにかきた〈友愛団〉の出張サークルの力を借りて推敲、最終的に上演された舞台と出版された本が大成功を遂げたのだ。これはそれまで内輪で知る人ぞ知る存在であった彼女に、一躍名声をもたらし、大量のファンレターを舞い込ませるほどであった。とはいえダブリンでは有名人でも田舎の地元では認めてくれる人はいないため、彼女は決意して夫を説得、旧友たちのいるロンドンへ舞い戻ることに。

こうして 1664 年 3 月に上京し、ロンドンの文壇で華々しくデビューしようとした矢先のこと、当時はまだ不治の病であった天然痘にかかり、かつての親友〈ロザニーア〉の看病むなし、6 月には亡くなってしまふ。しかし晩年の声望から、英文学史上でも公に活躍・人気を博した最初期の女性作家として知られている。

1. 底本テキストについて

キャサリン・フィリップスは、〈ポリアーカス〉と呼ばれる男性団員チャールズ・コットレルにアイルランドでの出来事を逐一手紙で伝えていた。これらは彼女の死後の 1705 年(再版 1709 年)、コットレルの編集によって *Letters of Orinda to Poliarchus* の題で書簡集として刊行されており、以下の信頼できる校訂テキストも近年出版されている。

Thomas, P. (ed.) (1990). *The Collected Works of Katherine Philips, the Matchless Orinda: Vol. II The Letters*, Essex: Stump Cross Books.

本稿では上記底本の本文と手紙番号に従い、疑問点については編集のもととなった以下の博士論文も参照した。

Thomas, P. H. B. (1982). *An Edition of the Poems and Letters of Katherine Philips, 1632-1664*. (Unpublished doctoral dissertation) University College of Wales.

なお、この博士論文については大英図書館の論文データベース EThOS に電子化して頂いたもので、現在はインターネット上での閲覧が可能になっている。

また *Western Translation Theory* (Robinson, 1997)では「手紙 14」と「手紙 36」、*Translation - Theory and Practice* (Weissort and Eysteinnsson, 2006)では「手紙 39a」をそれぞれ一部抜粋しているが、当時の文脈をつかむには不十分と言わざるを得ない。

2. 内容・背景について

このテキストが重要なのは、単に女性の書いた翻訳論というだけではなく、これが 17 世紀に生まれた翻訳サークルを報告するものであり、この集まりにのち〈翻訳アカデミー〉を作る若き日のロスコモン伯ウェントワース・ディロンが参加していたことにある。

王政復古時代の空気に合致したものとして、頌徳文 (panegyric) という文芸が当時流行した。むろんある種のプロパガンダではあったが、国家や君主を神話として祭り上げるために様々な文士が褒め称えよと巧みに筆をふるったのである。内戦期に政治パンフレットが大量印刷されたことで政治的出版がすでに英国へ根付き、言葉が大衆に訴える力になっていたが、王政復古にあたって頌徳文はひとつのパブリックショーとして娯楽にもなった。その頌徳文としての詩では多様な比喩が用いられたが、なかでも最も人気のあったのが、古代ローマへのアナロジーである。清教徒を連想させるキリスト教的なものではなく、たとえば君主をアウグストゥスにたとえ、古代の繁栄を思い起こさせることで、過去に重ねた現在・未来の国家を権威付け正当化していくものだ。

1662 年、ロスコモン伯は新妻とともに、アイルランドのダブリンにいた。新アイルランド総督のオーモンド公ジェイムズ・バトラー着任前後のこの街では、軍人・政治家として妻の伯父であるオーラリ伯ロジャー・ボイルが強大な権力を持っており、ロスコモン伯もその一族に連なるものとして安定した生活を送っていた。復古政府も機能し始め華やかになりつつあるダブリンだったが、そこへひとりの女性がやってきたことで、文芸の一大プロジェクトが始まることになる。その女性こそキャサリン・フィリップスだ。

友愛のもつれのため傷心のオリンダがダブリンにやってきたのは 62 年の 7 月末、偶然〈友愛団〉の男友だちがいたこと、そして夫から所用を頼まれたこともあって、しばらく滞在することになった。そこで仲良くなったのがオーラリ伯の親族の女性たちで、彼女たちにも二つ名が与えられ(そのなかにロスコモン伯の妻もいた)、そしてそのつながりが瞬く間に文芸プロジェクトへと拡大する。

主導したのはオーラリ伯だった。おそらくオリンダ本人の夫や親族の女性たちから変わった婦人がいるという噂は聞いていただろうが、そのなかでたまたまオリンダの訳したコルネイユ『ポンペイウスの死』(Pierre Corneille, *La Mort de Pompée*)の部分訳が目にとまり、政治的利用を思いつく。この劇で寛容な君主を称えれば、オーモンド公のような王党派だけでなく自らのような変節漢にも都合よい空気が作れるからだ。早速オーラリ伯はオリンダに会うなり完訳を薦め、推敲にも協力すると申し出る。誉められ悪い気のしない婦人は筆を執り、ふたりのやりとりはオリンダの性格も相まってすぐに周囲を巻き込み、ダブリン城近くにあるオーラリ伯の居宅トマス・コートを主な活動場所として、にわかにダブリン城文芸同人が始まる。集まった際には翻訳の草稿を取り上げて語り合い、手紙のやりとりでも推敲について意見の交換をする。オリンダを主

な訳者として、周囲の協力で訳稿を磨きあげていくのである。62年の8月に始まった翻訳は2~3ヶ月あとにはできあがり、原稿はオーモンド公の後援もあって上演されることになった。元来内輪主義のオリンダが抵抗するも流れは止まらず、オーラリ伯が私財をつぎ込んだ豪華な劇が翌年の2月に王立劇場で上演、名士たちが詰めかけ大好評を博す。同年ロンドンとダブリンの二カ所で刊行された訳本もベストセラーとなって、内輪で密かに知られる存在だったオリンダが、一気に世の名声を勝ち得ることとなった。

むろんロスコモン伯も妻からサークルに引き込まれ、自身も劇のプロローグを執筆し、数多くの候補のなかから採用されるのだが、貴族の彼からすれば一連の出来事は驚きであったに違いない。なぜなら妻の変った友人に過ぎない中流階級の女性が、周囲の才人の協力によりひとつの翻訳を完成させ、そして舞台と出版のどちらをも成功させたのであるから。合評のプロセスがひとつの翻訳を作り上げ盛り上がっていく様を間近で目にして、何の印象も受けなかったはずがない。事実、ロスコモン伯はこのやや年長の女性に影響され、自分から翻訳を始めている。ひとつは、オリンダから聞いた芝居への不満から取り組んだグアリーニ『忠実なる羊飼い』(*Il Paster Fido*)の部分訳、もうひとつはホラーティウスのオードを翻案した「オリンダへ」("To Orinda")である。このダブリン城文芸同人は、ロスコモン伯に文芸サークルを実体験させると同時に、翻訳への興味をかき立てるものとなったと言えよう。

以下、オリンダの送った書簡からは、17世紀中盤の英国の文芸サークルにおける合評の空気をよくうかがい知ることができる。

3. 訳文

3.1. 「手紙 14 / 1662.8.20 ダブリン」より

[...]さて、この地で思わぬ体験をしたことをお知らせ致しましょう。幸運からわたくし、オーラリ伯閣下とお近づきになれたのです。閣下は才優れた気さくなお方で、以来わたくしにもご親切にして下さって、きっとその親切心のあまり閣下は直截なご意見をおっしゃらなかったのだと思います。何かの偶然から、わたくしの訳した『ポンペイウス』の数場が閣下のお手に渡り、それを大変お気に召したらしく、わたくしにフランス語原典を送って下さいました。次にお目に掛かった際、その翻訳を続けよとあまりに熱心に勧めて下さったのですが、この頃まで王国を率いていらっしゃった人物が目の前でそんなつまらないことをわたくしにお求めになるのは何とも勿体なく、おやめいただくためにも、とりあえずその場を含む一幕分はやり遂げると応じました。そういう次第で、第三幕全体は今や英語になっております。これはどちらかと申しますと、取り組むだけの力がわたくしにあるといくらか買って下さったのは、閣下誤りでございます、そんな想いでものしたのです。とはいえこの件これだけで済まないだろう、とも思っていたところ、閣下はお預かりになるとたちまち(仕事の拙さを叱られるものと思っておりましたのに)そのまま続けよとの仰せで。[...]わたくし次の便で閣下の詩集をお送り致しますから、交換条件としてあなたの『死の神殿』[作:フィリップ・アベール]の訳を一部お分け下さいませ。[...]おまけとして、できるだけ速やかにわたくしの『ポンペイウス』もお送りするつもりです。閣下が頑なにわたくしへ『ポンペイウス』の翻訳をお望みになるのを、あなたは訝しんでおいででしょう。わたくしの手之余る

ことですし、すでに多くの方がお取り組みですから。とはいえ、わたくしからは何を申そうと詮無いことで、閣下にひたすらせがまれては断り切れず。こうとなれば最善は、一幕分をもうお送りしているのですから、暇を割いて残りをやるだけです。[...]

3.2.「手紙 17/1662.10.19 ダブリン」より

[...]こちらに新しい芝居小屋が出来、私見ではダヴナントのものより見事だと思っておりますが、舞台はまだ未完成です。[...]ロスコモン伯閣下はかなりの才人で、優れた天分をお持ちの、本当に前途有望なアイルランドの青年貴族でいらっしゃいます。詩篇のひとつを閣下が釈意訳したものは実に見事で、『忠実なる羊飼ひ』[作:ゲアリーニ]の〈Care selve Beate〉の場の訳も素晴らしいものでした。勲士リチャード・ファンショーより優れた箇所がいくつもございまして。[...]この部分はイタリア語では最高の場なのに英語では最低、というわたくしの発言を聞いて、まったくわたくしへの敬意からこのたび取り組んで下さったのです。掛かったのはほんの二時間、見たことも聞いたこともないくらい易々と流麗な手際で、手を掛けて磨き上げずにおられるのが大変残念なほどです。アータバンがまもなくそちらへわたくしの訳した『ポンペイウス』をお持ちしますが、これまで最高の才人ら大勢が同劇を長く訳してきたところへ、今さらわたくしの訳に存在価値を見出してもらえるものか心配です。どうかあなたのご意見お聞かせ下さいまし。[...]

3.3.「手紙 18/1662.10.22 ダブリン」より

[...]まだ申し上げてなかったのですが、アータバンは一幕分を除いた『ポンペイウス』全篇をお持ちすることになりました。急いでくれるので、そのために遅れることはないそうです。ただし今ちょうど彼へ送ったところですので、劇の残りの部分は彼の手で筆写してくれるものと思います。あなたのご意見お伺いできるのを待ち望んでおります。[...]

3.4.「手紙 19/1662.11？」より

[...]いよいよ『ポンペイウス』のご感想お伺い致します。よろしければ、第二幕フォーティノスの台詞末尾二行を改めて頂きたいのです。詩行はこうです、〈Boasts are but Air, but he revenges best That acts his braver Thoughts, and talks the least.〉ともかくも、この部分を含めたすべてを、あなたのご判断にみなお委ね致します。もしわたくしのおそばにいらっしゃったなら、オーラリ伯閣下に一行も見られぬうちにあなたのご指導を受けられましたのに。そうでなくてはわたくし、ものに対して自信のない気持ちを抱くしかないのです。本当に不本意ながら、書き写されたものがわたくしの想像以上の数広まっております。オーモンド公爵夫人には断りようもなく、夫人とフィラスターは幾人かの人に手持ちのものから筆写することを許しているのです。しかしわたくしは、あなたが直して下さったのを見るまでみなお断りしますので、こちらを発つより前に自筆に依らない写稿をすべてご指摘通り正せるよう、どうか機会があり次第わたくしに送って下さいまし。[...]

[訳註:印刷された戯曲本文では、接続詞・関係代名詞のみ修正されている。]

3.5.「手紙 21／1662.12.11」より

[...]『ポンペイウス』を大変念入りに吟味して頂き感謝しております。今回見つけて頂いた瑕疵は一箇所ですが、きっとまだ多く見つかることと存じます。前もってお伝えしておくつもりだったのですが、〈Effort〉という言葉を使う気はなかったのです。ですが次行の精神・迫力をみな失わない代替の韻、そのようなものを何か見つけられるだけの語彙を持ち合わせておりませんし、また少なくともこの十二年は馴染んできていることがわかっておりましたので。さらに、フランス語原典にもこの箇所では用いられていないことを知りながら、あえてそれでいいことに致しました。アータバンがまだ二幕分しかあなたにお渡ししていないのが大変気がかりです。[...]

[訳註: effort はこの当時まだフランス語からの借用語だった。]

3.6.「手紙 23／1663.1.10」より

[...]さてわたくしは〈Effort〉という言葉を変えようにあたり、あなたへ大いに感謝しなければなりません。その表現に与えて下さった工夫に思いを致すことがなければ、ここで表現を差し替えることはなかったでしょう。[ヨーク公爵夫人]へ献上されるものでは、それを修正して下さるようお願いいたします。〈Heaven〉と〈Power〉という言葉については、わたくしもあなたと同意見で、とりわけ後者についてはごもっともです。二音節のところにも用いても据わりとして耳障りに聞こえないことがあるような、代替語もあるかもしれません。『ポンペイウス』の他訳がどうなっているのか、市井宮廷がそれをどう見ているのか、ぜひとも聞きたく存じます。その写稿を手に入れようと方々当たっておりますが、まだ全篇入手叶わず、ただウォラー氏による第一幕があるだけです。勲士エドワード・フィルモーも一幕分、勲士チャールズ・セドリーやバックースト卿も一幕ずつおやりで。ところが第五幕が誰によるものなのかわたくしにはわからず、どうかできるだけ速やかに調べて教えてくださいまし。[...]

[訳註: heaven および power は通例 heav'n/pow'r として一音節で読むことが多かった。手紙 26 も参照のこと。]

3.7.「手紙 25／1662.1.31」より

[...]オーラリ伯閣下がこの地での『ポンペイウス』上演をお決めになりました。わたくしはその逆をお願いしたにもかかわらず、差し当たって閣下は事をお進めで、ローマ・エジプト風衣裳購入費として一〇〇ポンドを投資なさっておいでです。そのほか上流の方々が揃ってこれを舞台に上げようと大変ご熱心で、初日と相成りました来たる一週間後の火曜の上演をわざわざ我慢してご覧下さると心に決めてらっしゃいまして。ロスコモン伯閣下は上演のための序幕詩を、勲士エドワード・ディアリングは閉幕詩をお作りに。そのほか幾人かありがたいことに同じく序幕詩・閉幕詩を書いて下さいましたが、評判でしたのは今挙げましたふたつだけでした。わたくしがこれまでに読んだ序閉幕詩のうちでも随一の出来なのです。次便までにはお届けします。歌曲も幾人かの手で作曲されました。第一と第五のものはフィラスターが見事に、第三曲目はペット博士、四曲目はオーモンド公爵夫人の指名でお抱えのフランス人が作曲、それからオー

ラリ伯閣下付きのフランス人が二曲目を。こうしてすべてが整い、あわれわたくしは詮無いことと知りながら、何かの事故でうまく中止になって心安らかになりはしまいかと心底願いつつ、人様に晒さないでとぶつくさ申し上げるばかり。オーモンド公爵ご自身またはこの地のお歴々の皆様が上演を急いでいらっしゃりさえしなければ、わたくしにも食い止めるなり、この身の出立まで上演を遅らせるなり望みがあったでしょうが、流れに抗うこと叶わず、運命に任せるほかありません。何よりも、この件でずっとお便りし続けてあなたをうんざりさせてはいないか、同時にこの劇のお披露目で人様を退屈させないかと心配でございます。[...]

3.8.「手紙 26 / 1663.4.8」より

[...]先の金曜チェスターへ船でお発ちの貴婦人ティレルさまにお託して、印刷本となった『ポンペイウス』をあなたへ一包みお送りします。いいようにして下さいませ。[...]です。お手元から離される前に、どうか五幕二場のこの二行について修正案を下さいませ。

If Heaven, which does persecute me still,

Had made my Power equal to my Will.

この箇所気に入らないのは、〈Heaven〉と〈Power〉という言葉が、それぞれ二音節として用いられているところです。とはいえ、ここに落ち度を見つけるのはたやすくとも、直すのはわたくしにとって大変難しく。〈Effort〉という単語にしても喜んで投げ捨て、あなたの修正案を採りたかったのですが、オーラリ伯閣下が強いてそのままになさいます、わたくしの意思・判断に反することではあります。閣下の面目を立てるため、そうになっている次第でございます。印刷本の序幕詩は、お送りした写稿の時より格段よくなっていることにお気づきかと存じます。これと閉幕詩が誉めた出来とのご見識、意見を同じくしたこと、わたくしとしましても光栄に思います。このたびわたくし、お手紙と詩集の写稿をたくさん頂いておりました。知人からのものもありますが、『ポンペイウス』をお褒めの見知らぬ人からのものもあり、これでわたくしが虚栄心など持ち合わせておりましたら、うんざりしかねないところでした。と申しますのも、お手紙はあまりにお世辞まみれで、これではあなたへお伝えすることなど厚かましくてとてもできません。[...]

3.9.「手紙 27 / 1663.4.15」より

[...]『ポンペイウス』をもっとたくさんお送りできるとよいのですが、たった五〇〇部しか刷られていないため、ロンドンでの再販をお任せ下さいとのお手紙頂いたヘリングマンさんへお委ねできるだけの必要数を手に入れること叶いません。この件の交渉についてはうちの義弟へ指示しておきました。ところで、印刷に付されるに先立ち、やはりあなたの手直しをお願いしないわけには参りません。とりわけ先の便で書き送りました二行分と、あなたのご指摘通り改めたいと思っております。〈Effort〉という単語を用いた箇所です。ましてやあなたに校正刷りを直して頂かなくては、きっと誤ったまま刷られてしまいます、[...]

3.10.「手紙 29 / 1663.5.2」より

[...]『ポンペイウス』再版の件は、あなたにまったく一任致します、思うようにして下さい。必要

性の高いところのみ修正して頂けると幸いです。すでに、エジプト人司祭であるはずのアコレウスにクレオパトラの案内式部官の地位を与えるという間違いあり、との指摘を受けております。仮に誤りだとしても、元々のフランス語原典が彼を〈Ecuyer de la Reine〉と呼んでいるのをわたくしは踏襲しただけで、ゆえに相当する呼称としてその官職名を授けたのです。第三幕のあとは、自分でも見苦しいと思う表現をあえて用いております。高音域のレチタティーヴォ。これはそこにレチタティーヴォの響きがあってほしいと望んでやったことなのです。そのほかは、お送りしました修正入り本文を逐一ご参照下さい。[...]

3.11.「手紙 32／1663.6.3」より

[...]勲士エドワード・ディアリングが、劇最終幕のこの二行について、あなたのご意見を伺ってほしいとのことです。

I know I gain another Diadem,

For which none can be blam'd but Heav'n and him.

彼の物言いとは、(him)は文法として正しくないと、ここは(he)であるべきだとの由です。この問題を解決できるほどの批評眼がわたくしにはございませんので、あなたに判断をみなお委ねします。さて、例の共訳者らが近いうち上演を目論んでいるとの噂を耳にしました。ウォラー氏は、新訳に取り組んだわたくしに対してはまったく他意なしと請け合っていましたから、氏訳の幕が舞台に乗るのなら、わたくしの詩行を借用して取り込むこともあるでしょう。拙訳は贅辞に値するほどのものでもありませんが、実際大いにご活用頂き、その仔細がわかった暁には、ありがたく思うことと致します。[...]

3.12.「手紙 36／1663.9.17」より

[...]このお手紙を締めくくる前に、忘れずお伝えしておきます。つい先頃、例の才人らに訳された『ポンペイウス』の第二幕と四幕を目にし、読んだ上で公正に吟味しました。表現は格調高く優れたところもあり、また詩行もなめらかでありながら、それでいて凡百の批評家にすら付け入られる隙が数箇所。しかし驚かざるを得ないのが、彼らの採った勝手放題のこと、ほしいままに原典を追加削除改変しているのです。これはわたくしには、訳者に許されざる勝手、訳業の慎みにふさわしからぬものであるように思います。やはり書き方によって守られる作法がそれぞれ違って来るものとすれば、このように著者を歪曲するやり方は翻訳というより釈意とするのが相応なのです。とはいえ勝手放題にしても、なぜかその詩行には平板もしくは荒削りなところがあちこちあり、そのことはあなたも往々にしてお見つけになると存じます。その上、大変無様な韻が頻出、特にわたくしを苛立たせるのが、その想念がそれこそ全体に弱々しく、三・四行にわたってだらだら続いた挙げ句、五行目の真ん中で終わったりすることです。と申しますのもわたくしの考えでは、想念はいつも二行連句に収まるべきで、そうでなければ詩行は生気を失い、鈍くなってしまうのです。第三幕・五幕についてもどうか入手をお願い致します。とりわけ三幕をぜひとも目にしたいのです。わたくしはそこを、フランス語原典で格調も出来も最高の部分であると思うのです。とともに、その訳についてのあなたのお考えも聞きたくてたまりません。

[...]

3.13.「手紙 39／1663.10.13」より

[...]それから出たばかりの『ポンペイウス』の第三幕と五幕を送って頂けると大変ありがたく存じます。次のお手紙で、今手元にある二幕分の所見の続きを熟読精読ののちお届けする予定です。とはいえ、今やあなたは上演をご覧になったのですから、全体の印象をぜひ伺いたく存じます。と申しますのも、市井一般の見識によって、自らの意見を偏らせるなり影響を受けるなりしたくないのです。[...]

3.14.「手紙 39a／1663.10.26」より

[...]前便にて、出たばかりの『ポンペイウス』についていくつか所見をお伝えすることお約束しました。(実際目を通したばかりなのですが)率直にお伝え致します。[...]申し上げておきたいのは、わたくしの拙い意見によれば、ウォラー氏自身の幕も不満足を免れ得ないということです。〈Roman blade〉という言葉には大変あきれたほか、また英雄詩に二重押韻が多かったり、原典や歴史では異なるばかりかファルサリアの場で実際のコンスルと共演させているのにポンペイウスをコンスルと称したり、〈les Vautours〉に〈Pharsalian Kites〉とはどうにも気に入りません。〈le dernier preuve de leur Amitie[sic]〉を〈their new friendship〉と英訳したり、原著者の想念を数多く追加削除したりするのもそうです。それから(今持っている分の)第二・四幕にある瑕疵の数は、上演時にこの写稿から大改善されていないとすれば、これまでに見てきた良詩なるものと同程度です。わたくしがあなたのおそばにいたなら、意見を求めている類のもので、とりあえずは今これらの言葉をどうお思いになるか訊かせて下さいまし。

Ne me parlez donc plus de Tage & de Gange

Je connoy ma portée, & ne prends point de change.

これを氏は次のように英訳しています。

Talk not to me of Tagus, nor of Ganges

I know my right & care not for y^r changes.

そしてユバ、スキピオ、ポンペイウスの息子らを(韻のためでもあります)〈daring Sprights〉と呼び、クレオパトラに〈カエサルに求婚する〉と言わせ、そしてコルネイユには典拠のない〈ローマが君主制になりゆく〉という行を一〇ないし一二追加させるのです。こうなるとは、彼女の発言として時代的にふさわしいものとはわたくし思えません。当時カエサルは彼女の主人ではありませんでしたが、王冠を〈piqué d'honneur〉として退け、ローマの国王と思われなくしたのですから。わたくし思うに、翻訳とは気ままにディスカントをつける音楽家のようなのではなく模写をする際の画家のごとくするのが常であるべきで、そして翻訳で守るべきは、これら紳士からよくよく思い知らされいよいよ身に染みたのですが、コルネイユの想念を宛先に書くことだったのです。それはつまりコルネイユがイングランド人だったならやったはずのことを想定し、元の詩行にも元の韻律にも(幸いできた場合以外は)縛られることなく、いつも元の意味を宛先とすること、もしくはは言ってしまう『死の神殿』が訳されたように、原典がそのものの外観を損なわぬ程度の姿

でありつつ、彩りとして別の言語の豊穡が残るよう訳すことなのです。しかし最後に一言念押ししておきたいのですが、これら紳士の訳業について述べてきたのも、自分の話をするというより、ただあなたの意見を伺いたい一心からなのです。 [...]

.....

【著者紹介】

大久保友博 (OKUBO Tomohiro) 京都大学大学院人間・環境学研究科博士候補生、大阪市立大学・白鳳女子短期大学非常勤講師。翻訳理論・英国翻訳論史専攻。〈大久保ゆう〉名義にて主にオーディオブック分野での文芸翻訳に携わる。連絡先: holmes@alz.jp

.....

【参考文献】

- Allen, R. J. (1967). *The Clubs of Augustan London*, Hamden: Archon.
- Amos, F. R. (1920/1973). *Early Theories of Translation*, New York: Octagon Books.
- Barnard, T. (2004a). Boyle, Roger, first earl of Orrery, *Oxford Dictionary of National Biography*, v. 7, Oxford: Oxford University Press, 109-114.
- Barnard, T. (2004b). Butler, James, first duke of Ormond, *Oxford Dictionary of National Biography*, v. 9, Oxford: Oxford University Press, 153-163.
- Beal, P. (1998). *In Praise of Scribes: Manuscripts and their Makers in Seventeenth-Century England*, Oxford: Clarendon Press.
- Buckingham, E. M. (1902). The Matchless Orinda, *Sewanee Review* 10: 269-284.
- Chernaik, W. (2004). Philips, Katherine, *Oxford Dictionary of National Biography*, v. 44, Oxford: Oxford University Press, 59-63.
- Clingham, G. (2001). Knightly Chetwood's A Short Account of Some Passages of the Life & Death of Wentworth late Earle of Roscommon: A Transcription and Introduction, *Restoration*, 25 (2): 117-138.
- Cowan, B. (2005). *The Social Life of Coffee: The Emergence of the British Coffeehouse*, New Haven: Yale University.
- Cronin, M. (1996). *Translating Ireland: Translation, Languages, Cultures*, Cork: Cork University Press.
- Dillon, W. (1680). *Horace's Art of Poetry made English*, London: Herringman.
- Dillon, W. (1684a). *An Essay on Translated Verse*, London: Tonson.
- Dillon, W. (1684b/1971). *Horace's Art of Poetry made English*, 2nd ed., Menston: Scholar Press.
- Dillon, W. (1685/1971). *An Essay on Translated Verse*, 2nd ed., Menston: Scholar Press.
- Dillon, W. et al. (1714). *Poems on Several Occasions*, London: Curll.
- Dillon, W. et al. (1717). *Poems*, London: Tonson.
- Doody, M. A. (1998). Gender, Literature, and Gendering Literature in the Restoration, *The*

- Cambridge Companion to English Literature 1650-1740*, Cambridge: Cambridge University Press, 58-81.
- Gillespie, S. (2004). Dillon, Wentworth, fourth earl of Roscommon, *Oxford Dictionary of National Biography*, v. 16, Oxford: Oxford University Press, 226-228.
- Hammond, P. (1998). Classical Texts: Translations and Transformations, *The Cambridge Companion to English Literature 1650-1740*, Cambridge: Cambridge University Press, 143-61.
- Johnson, J. W. (1972). The Classics and John Bull, 1660-1714, *England in the Restoration and Early Eighteenth Century*, Berkeley: The University of California Press, 1-26.
- Jose, N. (1984). *Ideas of the Restoration in English Literature 1660-71*, Cambridge: Harvard University Press.
- Lipking, L. (1970). *The Ordering of the Arts: in Eighteenth-Century England*, Princeton: Princeton University Press.
- Liewellyn, M. (2002). Katherine Philips: Friendship, Poetry and Neo-Platonic Thought in Seventeenth Century England, *Philological Quarterly* 81 (4): 441-68.
- Morrah, P. (1979). *Restoration England*, London: Constable.
- Niemeyer, C. A. (1933). The Life and Works of the Earl of Roscommon. (Unpublished doctoral dissertation). Harvard University, Cambridge.
- Picard, L. (1997). *Restoration London*, London: Weidenfeld & Nicolson.
- Robinson, D. (ed.) (1997/2002). *Western Translation Theory from Herodotus to Nietzsche*, 2nd ed., Manchester: St. Jerome Publishing.
- Russell, A. (2010). Katherine Philips as political playwright: 'The Songs Between the Acts' in Pompey, *Comparative Drama* 44 (3): 299-323.
- Saunders, J. W. (1964). *The Profession of English Letters*, London: Routledge.
- Schut, R. (2011). 'La Femme Forte': Katherine Philips and the Politics of her Dublin Writings, 1662-3, *Early Modern Englishwomen Testing Ideas*, Surrey: Ashgate, 107-20.
- Souers, Ph. W. (1931). *The Matchless Orinda*, Cambridge: Harvard University Press.
- Stanford, W. B. (1977). *Ireland and the Classical Tradition*, Dublin: Figgis.
- Steiner, G. (1975/1998). *After Babel: Aspects of Language and Translation*, 3rd ed., Oxford: Oxford University Press.
- Thomas, P. H. B. (1982). An Edition of the Poems and Letters of Katherine Philips, 1632-1664. (Unpublished doctoral dissertation). University College of Wales.
- Thomas, P. H. B. (1988). *Katherine Philips ('Orinda')*, Cardiff: The University of Wales Press.
- Thomas, P. H. B. (ed.) (1990). *The Collected Works of Katherine Philips, the Matchless Orinda: Vol. II The Letters*, Essex: Stump Cross Books.
- Trickett, R. (1967). *The Honest Muse: A Study in Augustan Verse*, Oxford: Clarendon Press.
- Trolander, P. and Z. Tenger. (2004). Katherine Philips and Coterie Critical Practices, *Eighteenth-Century Studies* 37 (3): 367-87.

- Trolander, P. and Z. Tenger. (2007). *Sociable Criticism England 1625-1725*, Delaware: The University of Delaware Press.
- Tytler, A. F. (1813/1978). *Essay on the Principles of Translation*, Amsterdam: John Benjamins.
- Venuti, L. (2001). Neoclassicism and Enlightenment, *The Oxford Guide to Literature in English Translation*, Oxford: Oxford University Press, 55-64.
- Weissbort, D. and A. Eysteinsson. (2006). *Translation - Theory and Practice: A Historical Reader*, Oxford: Oxford University Press.
- Winbrot, H. D. (1969). *The Formal Strain: Studies in Augustan Imitation and Satire*, Chicago: The University of Chicago Press.
- Widmann, R. L. (1967). The Poems of Wentworth Dillon, Earl of Roscommon (1637-1685): A Critical Edition. (Unpublished doctoral dissertation). The University of Illinois, Urbana.
- Wiseman, S. (2001). Women's Poetry, *The Cambridge Companion to Writing of the English Revolution*, Cambridge: Cambridge University Press, 127-147.
- Womersley, D. (1997). Introduction, *Augustan Critical Writing*, London: Penguin, xi-xliv.

大久保友博 (2010) 「翻訳における一軸的批評の解体」日本通訳翻訳学会第 11 回年次大会口頭発表

大久保友博 (2011a) 「ジョン・デナムの翻訳論——〈作品〉への予感」『歴史文化社会論講座紀要』8: 49-68. 京都大学大学院人間・環境学研究科歴史文化社会論講座

大久保友博 (2011b) 「ジョージ・スタイナーと翻訳の現象学」日本通訳翻訳学会関西支部第 27 回例会口頭発表

大久保友博 (2011c) 「私訳: George Steiner's *After Babel*」日本通訳翻訳学会関西支部第 27 回例会配布ハンドアウト

大久保友博 (2011d) 「近代英国翻訳論——解題と訳文 ジョン・デナム 二篇」『翻訳研究への招待』6: 17-31. 日本通訳翻訳学会翻訳研究育成プロジェクト

大久保友博 (2012a) 「近代英国翻訳論——解題と訳文 ジョン・ドライデン 前三篇」『翻訳研究への招待』7: 107-124. 日本通訳翻訳学会翻訳研究育成プロジェクト

大久保友博 (2012b) 「ロスコモン伯と翻訳アカデミー」『関西英文学研究』6(2012): 13-20. 日本英文学会関西支部